

養蜂めぐり歩き <その7>

おわりに-これからの養蜂を考える-

今シリーズでは、エチオピアやモザンビーク、イランにおける在来もしくは伝統養蜂から、宮城県丸森町における近代的養蜂まで、様々な養蜂の方法を紹介してきた。特に伝統的な養蜂においては、地域で入手できる資材を工夫して巣箱を作り、自然林やマングローブの花蜜といった未利用資源を活用してきた。広い土地を必要とする農業活動と競合することなく、土地を持たない小農や女性でも小規模で始められる収入活動になり得る。また、花粉媒介昆虫として農業生産に寄与すると同時に、授粉のための販売や貸出しによって経営の柱にできることもわかった。

一方で、未利用資源を活用する養蜂でもハチミツが無限に生産できるわけではなく、季節を通じた蜜源である花蜜の他、ミツバチの蜂群（コロニー）の数量にも左右される。丸森町の回で紹介したように蜜源植物を把握し、蜜源のない時期には砂糖水を与えるといった手入れが必要とされる。多くの伝統養蜂では、いわば狩猟採集に近い活動として、粗放的に地域資源と伝統知識を活かすことで、うまく自然との調和が図られてきた。しかし、近年は地域内の人口増加に加えて、収入源としての商業的な活動になってくると、伝統的な手法・知識とは馴染まない上、地域資源への負荷も大きくなる。耕作農業と同じように、これまでは種を撒いて実がなるのを待つだけであったものが、生産性を追い求めると、肥料や農薬といった資材の他、営農管理についての技術や知識が必要になる。モザンビークでの伝統的巣箱から近代的巣箱への移行のように、農家同士による学び合いによる機会でもなければ、習得はなかなか厳しいだろう。

こうした変化に加えて、ミツバチという生物を扱う養蜂は、農作物と同様に、外的な要因に影響されやすい。本シリーズ連載中に読者の一人から、2006年に米国で起きた蜂群崩壊性症候群と称される、大規模なミツバチの失踪に関する情報提

供があった。原因は未だ特定されておらず、複数の要因が関係していると考えられるものの、農薬による影響の報告は多い。エチオピアの活動においても、近代型巣箱から蜂群がいなくなってしまう現象が頻発し、近隣農家による農薬の散布が要因とされた。また、気候変動による温暖化が蜜源である植物の開花や、ミツバチの生息適地に影響を及ぼすとも言われている。

小農や女性にも有効な収入活動でありながら、こうした様々な変化や影響の下にある養蜂活動を振興していくには、どのような点に留意していく必要があるのだろうか。本シリーズを通じた検証として、以下の3点を挙げてみたい。

①地域の資源・能力に適した方法：一律に伝統養蜂か近代的かではなく、地域の資源量や農民の知識・技術に合った手法を検討する。

②地域としての取組み：地域の産業として個々の養蜂活動を支えると共に、農民同士で学び合える場・機会を取り入れる。

③自然環境とのバランスに配慮：有限だが未利用の資源を活用すると共に、周辺の人間活動や環境の変化に敏感な生き物（ミツバチ）の恩恵による生業であることを認識する。

これらを実践するためには、相当の時間をかけた試行錯誤による、段階的な活動が求められるであろう。個々の農家が知識・技術を高めると同時に、地域住民に意識が浸透していくには、一過性の活動では限界がある。こうした中、丸森町によるザンビアとの活動は、養蜂にとって大きな可能性であり、今後とも応援していきたい。



伝統養蜂と移行型巣箱、近代的巣箱を組み合わせた試行活動（エチオピア）